



Title	英学黎明期における英文法書に関する一考察：斎藤文法に至る Participial Construction の概念、訳語の変遷について
Author(s)	佐古, 敏子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 55-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57349
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

英学黎明期における英文法書に関する一考察 —斎藤文法に至る Participial Construction の概念、訳語の変遷について—

佐古敏子

1. はじめに

今日、「学習英文法」として定着した文法用語が斎藤秀三郎『新標準英文典¹』にみる訳語に負うものであることは周知のところであるが²、我が国において、こうした英文法体系の研究を志したのは、はたして、いつごろのことであろうか。

本稿では、研究対象を英学黎明期³に絞り、英学の所産ともいべき訳述英文法書にみる概念、訳語に纏わる変遷を辿ることで、斎藤文法に至る英文法体系研究の経緯について考察する。

文法用語のうち、筆者は拙稿の中で⁴、verbs 周辺、ことに participles と gerund を調査対象に絞り、その概念、訳語に係る変遷、ならびに「(現在 / 過去) 分詞」「動名詞」なる現用語の訳述起源について、さらに、訳述の際、依拠したであろう原書を究明すべく、検証を試みた。結果、我が国で初めて participles に「分詞」、gerund に「動詞 (状) 名詞」あるいは「動詞 (上) 名詞」なる訳語が用いられた英文法書 (英文典) が明らかとなった。それは『英文辞典類』であった。また、その底本とされるのは『英吉利文典』(俗称『木の葉文典』)のみでなく、訳述者、足立梅景が依拠したであろう原書について、筆者はその例文 (句) の一致から『ピ子ヲ氏原板英文典』の可能性を加えたいと考え、これを結論とした。

しかし、上記の検討過程において、現用語 participial construction にあたる概念、訳語に関する変遷については調査が及ばなかった。よって、本稿の意図は participial construction を中心に、その概念、訳語の推移を調査、検討することにある。くわえて、斎藤秀三郎の英文法書において、初めて我が国で用いられ、定訳となったとされる「分詞構文」なる現用の訳語にかかわる訳述起源についても明らかにすべく、探究しようとするものである。

2. 先行研究の現況とその問題点

英学黎明期における訳述英文法書について内容的考察に特化した研究、ことに verbs あるいは、verbs 周辺 (verbal 等) に係る概念、訳語、ならびに例文 (句) などの内容に踏み込んだ研究となると、筆者が検討した限りでは、井田好治 (1968)、杉本つとむ (1993)、伊藤裕道 (1998)、水野修身 (2001)、そして朱鳳 (2009) 各氏、くわえて和蘭文法、日本語文法との関連を視野に入れ、調査するも、岡田和子 (2006) そして飛田良文 (2008) 両氏の限られた実状を確認する結果となった⁵。

さらに、その中であって、当該期における各訳述英文法書と、それぞれの底本、あるいは底本であろう (以下、底本と記す) とされる各原書との照合に関しては、いずれも多くはなされていないことから、本稿では、訳述英文法書と原書の両者における異同の有無を注視することに重きを置き、participial construction に関する解説、例文 (句) について検討を行う。

¹本書は、日本人英学者による「学習英文法」として、初の完成版とされる英文法書。『新標準英文典 (上)』同じく『(下)』があり、共に、改新再訂版、吾妻書房、1950。

²斎藤の英文法書に関する伊藤氏 (2000) による評価を以下に示す。

伊藤裕道「刊行 100 年斎藤秀三郎 *Practical English Grammar* (1898-99) を読む」(『日本英語教育史研究』第 15 号、日本英語教育史学会、2000) pp.113-132。

「日本人による本格的文法書として初めて登場し、(筆者により中略) 今日の英文法学習にも、斎藤文法 (用語) が脈々と受け継がれている」

³「英学黎明期」の定義については諸説あるが、定宗数松『日本英学物語』(三省堂 1939) によれば、

「フェートン号事件 (1808) からガイド・フルベッキ等が教鞭をとる開成学校設立 (1870 頃) に至るまで」を「英学黎明期」と区分する。pp. 9-37。

⁴「幕末・明治初期の英文典における一考察—Gerund の概念と訳語について— (研究ノート)」(『洋学』 第二十一号、洋学史学会、2014 年)。pp.269-294。

⁵各先行研究の詳細については、本稿【参考文献】を参照されたい。

3. 本研究の対象と方法

具体的には、現用語 **participial construction** に関する解説に加え、例文(句)の変遷に関する一連の流れを把握する必要から、筆者は、まず、英学黎明期にみる各訳述英文法書と、その底本とされる原書とを併せ、これを編纂、あるいは刊行された年度順に分類の上、それぞれの原文より **verbal**、ことに現用語 **participial construction** にあたる概念、訳語、例文(句)などの当該箇所を照合する。両者間における異同の有無、ならびに、その要因について調査を行い、さらに、概念、訳語の推移について検討を加えたい。

4. 英語史にみる Participial Construction にかかわる定義について

本研究対象とした英学黎明期の訳述英文法書を調査するにあたり、当該期の英語史における **verbal** ことに **participial construction** に纏わる定義について、いささかの把握が必須と考える。よって、ここでは、その手がかりとしてスウィート (Henry Sweet) (1891)⁶から、古英語期 (Old English period) の英文法書 (原書) にみる **participial construction** に関する概念、定義について概観したいと思う⁷。

4.1. ENGLISH GRAMMAR LOGICAL AND HISTORICAL (1891:116-117)

The gerund, *seeing* as in I remember *seeing* him, is a noun-verbal, the present participle, which has the same form, being an adjective-verbal, *running* as in *running* water. The simple participles are the present active participle, such as *seeing*, *running* in *seeing* a crowd, I stopped, and I saw him *running* to catch the train, and the preterite passive participle, such as *called*, *thrown* in a boy *called* John, I saw him *thrown* out of his trap. There are **periphrastic participles**, such as (中略) the present passive participle *being seen* in *not being seen* by any one, he escaped.

スウィートによれば、gerund「動名詞」とは、例文 (I remember *seeing* him.) の *seeing* にみる noun-verbal「名詞的準動詞」であり、その形態が同じである present participle「現在分詞」とは、例句 (*running* water.) の *running* にみる adjective-verbal「形容詞的準動詞」としている。

また、分詞には、simple participles「単純分詞」があり、これには例文 (*seeing* a crowd, I stopped. あるいは、I saw him *running* to catch the train.) における *seeing* や *running* といった present participle「現在能動分詞」あるいは、例文 (I saw him *thrown* out of his trap.) における *thrown* のような preterite passive participle「過去受動分詞」があるとしている。

さらに、こうした simple participles「単純分詞」のほか、通常、2語以上で示された分詞 periphrastic participles「迂言的分詞」があり、例文 (*not being seen* by any one, he escaped.) における *being seen* のような present passive participle「現在受動分詞」がこれに当たるとする。

しかし、ここでは、分詞句をなす分詞の語数により simple participles「単純分詞」あるいは、periphrastic participles「迂言的分詞」があることを明記しているものの、現代の **participial construction**「分詞構文」に纏わる範疇について、スウィートは一切触れていない。したがって、「原因・理由」「条件」「時」「付帯状況」といった意味機能に関する解説も確認できない。くわえて、従位接続詞を用いて同義の副詞節に書き換え可能であった点についても触れていないことから、現代の **construction**「構文」としての組織化が、当該期にあっては、まだ、十分には行われていなかったことも推測できよう。

以上、スウィート(1891)の見解について概観したが、その調査結果を踏まえ、次に、我が国の「学習英文法」として定着した、先の斎藤秀三郎の英文による文法書 (1898-99)⁸ならびに、

⁶Henry Sweet, *ENGLISH GRAMMAR LOGICAL AND HISTORICAL*, Oxford, 1891.

⁷引用に際し、文法用語をさす太字、例文(句)等に施した下線、あるいは、原文の解説が長きにわたる場合、筆者により適宜、省略の上、これを(中略)等とした。

⁸HIDESABURO SAITO, *PRACTICAL ENGLISH GRAMMAR*, Kobunsha Pub. Co. Ltd., TOKYO, 1898. 本書は我が国において日本人により初めて英語で書かれた英文法書とされる。

和文による文法書（1949）⁹から、*participle* あるいは、*participial construction* の当該箇所を引用の上、検討する。

4. 2-1 *PRACTICAL ENGLISH GRAMMAR* (1898-99:415)

The **Participial Construction** is a brief and elegant way of joining an introductory statement to the principal statement. The Participle in the construction is grammatically parsed as a Verbal Adjective qualifying its Noun, **but is really equivalent to a Verb and Conjunction.**

The warriors disguised themselves as women, and gained ready admittance.

The warriors, *disguising* themselves as women, gained ready admittance.

He saw me, and ran away.

Seeing me, he ran away.

本書で斎藤が挙げた例文（The warriors, *disguising* themselves as women, gained ready admittance. ならびに *Seeing* me, he ran away.）における *disguising* あるいは *Seeing* は、通常 *simple participle* 「単純分詞」として扱われるものである。

いずれの分詞句も、意味機能の視座においては、まさに現代の *participial construction* 「分詞構文」の例に相当するものであり、上にみる「実際のところ、動詞と接続詞を兼ねた働きをする」（*but is really equivalent to a Verb and Conjunction.*）の付注（太字は筆者による）から、当該期にあって、斎藤がその概念をすでに、的確に把握していたことも、あわせて確認できよう。

さらに、ここで注視すべきは、斎藤が示した用語が現用語の *participial construction* と明記されている点であろう。*participles* を含んだ単なる「分詞句」と区別し、斎藤はこれを *construction* 「構文」と捉えている。分詞が節に相当する際、元来の動詞の意味に加え、その構造も保持していることを斎藤が、すでに認識していたことで、これに *construction* 「構文」なる語を用い、区別したのではないかと推察する。

筆者が調査した限り、我が国の文法書のうち、*participial construction* なる文法用語（英語）が初めて用いられたのが斎藤による本書であろうと考える。となれば、斎藤が著した上掲書のうち、後者（1949）の中で、斎藤は *participial construction* に、如何なる訳語を与え、どのように扱ったのであろうか。当該箇所を筆者により要約の上、これを以下に示す¹⁰。

4. 2-2 『新標準英文典（下）』（1949:450）

Participles（分詞）の用法。— Participles（分詞）には用法が四つある：—

(I) Adjective（形容詞）として：— I saw a man *writing* at the desk.

(II) **Participial Construction**（分詞構文）として：— *Writing* something on a piece of paper, he gave it to me.

(III) Complement（補語）として：— He sat *writing*. I found him *writing*.

(IV) Finite Verb（有主語動詞）の一部として：—（筆者により後略）

ここでは、*participles* の用法を4分類とし、(II) *Participial Construction* において、その例文（*Writing* something on a piece of paper, he gave it to me.）は、前者（1898-99）のそれとは異なっているものの、今日、定訳となった「分詞構文」が確認できる¹¹。我が国初の英語による文法書と称される上掲書（4. 2-1）で、*participial construction* なる文法用語が初めて用いられたと同じく、筆者が調査した限り、訳語「分詞構文」が初めて用いられたのも、斎藤による本書であろうと推定するものである。

⁹斎藤秀三郎『SAITO'S NEW TEXT=BOOK OF ENGLISH GRAMMAR VOL. II 斎藤 新標準英文典下』吾妻書房、1949。本書では各例文に和訳が附されているが、筆者によりこれを省略した。

¹⁰本書では、各例文に和訳が附されているが、同じく、筆者によりこれを省略した。

¹¹例文については、ほかに *The wicked men saw the officer, and ran off.*, *The wicked men, seeing the officer, ran off.* の例もみる。上掲書（脚注8）pp. 451-455。

さらに、斎藤が創出した本書における訳語については、一部、現用の文法用語でないものがみられるものを除き、異同がほとんどみられない点で、こうした文法用語が定訳となり、今日、斎藤文法が「学習英文法」として定着したと称される所以であろうと考える¹²。

5. Participial Construction の概念と訳語に関する変遷

ここでは、訳述、編纂あるいは、版行年度順で筆者が 6 区分した各訳述英文法書とその底本であろうとされる原書における異同の有無に重きを置き、その訳述起源を探究する。よって、各区分ごとに、両者の詳細な照合が必須と考え、訳述英文法書に先行して、まず原書から、順次、検討を行う¹³。

5.1 『語厄利亜語林大成』について

5.1.1 *Groot Woordenboek der Engelsche en Nederduytsche Taalen*¹⁴ (1735:70-71)

Participles participate of Verbs, and are used and declined as Nouns, Adjectives,
(筆者により中略) as, the *working man*, the *sowing woman*, the *destroying people*,
a [sic] or the *beloved man*, the *printed book*¹⁵.

participles についての定義が確認され、その例として、現在分詞、過去分詞が挙げられているものの、すべて形容詞の限定用法としての例であり、叙述用法、あるいは、今日の「分詞構文」にあたる記述はない。したがって、その例も確認できない。

5.1.2 『語厄利亜語林大成』¹⁶ (1814) [十一丁裏]

動静詞 (筆者注：現用語「分詞」) は、多くは～ing を添て以て動詞の如くに訳して還つて虚静詞の如くに使用せるものにして**虚静詞** (同：形容詞) の如くに為すものなり 又動静詞上に 又は **an the** 等の冠詞を附して、其下に実詞を置かざるときは、則 其動詞變じて、**実詞**(同：現用語「名詞」)となるなり 譬へは尋ヌルㄱ (筆者注；こと) 思フㄱ等の如く 其尋ね、或は思ひの 所為を現はすものなり(中略) その使用の次序に因つて種々の変化をなすが故に反つて煩しからん 嫌ずればなり¹⁷ (仮名遣いは筆者による)

底本とされる¹⁸5.1.1 *Groot Woordenboek der Engelsche en Nederduytsche Taalen* の当該箇所と照合すれば、そこには、現用語の「分詞」に当たる「動静詞」に纏わる定義が確認でき、上述の 5.1-1 と 5.1-2 のそれがほぼ一致していることから、本書『語林大成』が確かに原書 5.1-1

¹²今日の学校英文法との異同がみられる点として、Dative Verbs「與格動詞」を「授与動詞」とする点、また、Impersonal Verbs「いわゆる非人称動詞」が今日では動詞分類としてではなく、「非人称 it 構文」で扱われる点が挙げられよう。

¹³原書を先行して検討するも、本稿の調査対象が、我が国における訳述英文法書であるため、参考とすべく原書の引用箇所が長きにわたる場合、筆者により適宜、省略の上、最小限の引用に留めた。

¹⁴W. Sewel, *Groot Woordenboek der Engelsche Taalen*, Amsterdam, 1735.

本書は【Dutch Grammar】と【De Engelsche Spraakkunst】の二部構成であり、ここでは後者からの引用である。各品詞について概念、例文(句)について蘭語と英語による対訳となっているが、筆者により、蘭語を省略する。

¹⁵本書では、単数形の名詞について 6 種(順に Nom., Gen., Dat., Acc., Voc., Abl.) の格変化形を含む分詞句の例を挙げているが、ここでは、それぞれ、Nom. (主格) に纏わる 1 例を列挙するに留めた。

¹⁶本木正栄、馬場貞歴等譯編『語厄利亜語林大成』文化 11 年 (1814)。

¹⁷『語林大成』は各英単語にオランダ語が処々に添えられる点で、「英蘭日三か国語対訳辞書」ともいえるが、その「凡例」では、動詞に纏わる文法用語、及び、例文(句)はすべて、日本語で表記され、原語による記載がない。

¹⁸井田好治「長崎原本『語厄利亜興学小筈』『語厄利亜語林大成』の研究」(『長崎原本研究と解説』日本英学史料刊行会編、大修館書店、1982)において、以下の指摘をみる。pp.78-79。

「正栄が、語厄利亜学草創の業に励んでいたころ舶載されたもので、「語厄利亜国訳辞書原明和蘭国ウキルムセウキル撰増訳引書」がある。(以下、筆者により中略) 当然のことながら、セウエルの品詞分類法もまた『語林大成』と完全に一致するわけである。

に依拠したといえよう。しかし、その例(句)については、大きく異同がみられる点で、5.1-1の底本が本書5.1-2とは断定しがたいのではないか。筆者はほかに依拠した原書の存在も否定できないように思う。

5.2 『英文鑑』について

5.2-1 *English Grammar*¹⁹ (1822:75)

The **participle** is a certain form of the verb and derives its name from its participating, not only of the **properties of a verb**, but also of those of an **adjective**; as, “I am desirous of *knowing* him,” “*admired and applauded*, he became vain”; “*Having finished* his work, he submitted it.”, &c.

participle なる語が動詞と形容詞の性質を持ち合わせることに由来し、3種に分類されること。くわえて、その定義についての記述も確認できる。また、その例として I am desirous of *knowing* him. (筆者注：現用の「動名詞」)に加え、*admired and applauded*, he became vain (同：Having been、あるいは、being が省略された現用の「受動態の分詞構文」)、さらに、*Having finished* his work, he...(同：現用の「完了形の分詞構文」と解される)も確認できるが、ここに、participial construction あるいは、それに相当する用語は宛がわれていない。

5.2-2 *Engelsche Spraakkunst*²⁰ (1829:54)

De **deelwoorden** worden aldus genoemd, omdat zij deel hebben aan de beteekenis den aard der **werkwoorden en ook der bijvoegelijke naamwoorden**, als: I am desirous of *knowing* him, Ik ben begeering hem te kennen. *Admired and applauded*, he became vain, Bewonderd en toegejuicht, werd hij trotsch.

本書は F. M. Cowan が 5.2-1 *English Grammar* を底本として翻訳したとされる。5.2-1では、participle の定義として the properties of a verb, but also of those of an adjective としているが、本書の中で、Cowan はその定義を werkwoorden en ook der bijvoegelijke naamwoorden としている点に注視したい。例もほぼ同じであるが、前者(5.2-1)でみた *Having finished*... (現用の「完了形分詞構文」)の例が本書にはない。Cowan の判断によるものなのか、あるいは、版の違いによるものなのか、詳細な調査が必要となる。

5.2-3 『英文鑑』²¹ (1840-41)「上編卷之六」[二員三位五様六時 四頁]

寛説様トハ 二員三位ヲ定メスシテ事ヲ汎言スルナリ 分領辞モ亦此ニ属ス 是源ヲ動辞ニ取り 添名辞 (筆者注：現用語「形容詞」) 及ヒ添旁辞 (同：「副詞」) ノ義ヲ兼領スルカ 故ニ 此名アリ 其用法左ノ如シ

I am desirous of *knowing* him, 我レ 欲セリ ヲ 知ランコト 彼レヲ
Ik ben begeering hem te kennen.
Admired and applauded, he became vain,
驚嘆サレ且コエヲ揚ゲ称赞セラレテ 彼レハ ナリシ 傲慢ニ
Bewonderd en toegejuicht, werd hij trotsch.

¹⁹Lindley Murray, *English Grammar*; London, 1822.

²⁰F.M.Cowan, *Engelsche Spraakkunst*, Amsterdam, 1829.

²¹渋川敬直譯述/藤井資補訂『英文鑑』天保11-12年(1840-41)。

『英文鑑』では品詞をさす語に「詞」を宛がうのではなく、動詞分類は総て「辞」なる訳語で示す。本稿の研究対象とした、英学黎明期における各訳述英文法書に用いられたそれとは大きく異とするところであり、調査した限りではあるが、この訳語はほかに確認できない。渋川による<文法用語>の特異性(「動詞」を「動辞」と訳出する等)がここでも認められるが、杉本氏も以下の見解を示す。杉本つとむ『英文鑑—資料と研究—』ひつじ書房、1993年。

「蘭学の伝統でほぼ定着したと思われる文法用語がここにみえないのである。」pp.605-607。

『英文鑑』においても、5.2-1 でみた *Having finished, ...* の例が 5.2-2 と同様、挙げられていない。結果、原本とされる前者 (5.2-1) の *English Grammar* と照合すれば、かなり異同があることになる。これに対し、後者 (5.2-2) と『英文鑑』においては、文法用語、概念、ならびに例文 (句) についても和蘭語と英語の対訳による例文 (句) を照合の結果、すべて一致をみることで『英文鑑』が *Engelsche Spraakkunst* (5.2-2) を底本とした重訳である証左といえよう。

また、例文に *Admired and applauded, he ...* が挙げられていることで *participial construction* という文法範疇、用語についての記述がみられないものの、現用の「受動態の分詞構文」用法の認識があり、その概念、定義がかなり定着していたことがわかる。

さらに、本書では、現用の「分詞構文」なる訳語こそ確認できないものの、上の例文 (*Admired and applauded, he became vain.*) の和訳として、助詞<テ>を補い、<驚嘆サレ且コエヲ揚ゲ称賛セラレテ 彼レハ ナリシ 傲慢ニ> の付注が確認できること、さらに、引用文の下線部にみる解説<添旁辞ノ義ヲ兼領スルカ故ニ>から、こうした分詞に副詞句の働きがあるものと捉え、当該期にあって、渋川の中で、すでに現用の分詞構文に係る認識がなされていたであろうことも明らかとなった。大いに評価されうる点ではないかと考える。

5.3 『英吉利文典(木の葉文典)』について

5.3-1 『英吉利文典(木の葉文典)』²² (1865:30)

(原題 *The Elementary Catechisms, English Grammar*²³)

Q: What is a Participle ?

A. A **Participle** is a word so called from the Latin (中略), although it is considered to be a form of the **verb**, it partakes also of the nature of an **adjective**, and is sometimes called a **Verbal Adjective**.

Q: Give an example of a participle ?

A. In the sentence— a *running* stream—

Q: How many participles are there ?

A. There are two kinds of participles, the imperfect or active participle, as, —*walking*, and the perfect or passive participle, as, —*walked*.

本書は Q & A 問答式品詞解説による文法書である²⁴。ここでは、例として a *running* stream、*walking*、そして *walked* が挙げられ、*participle* なる文法範疇も、その定義も確認できる。ただ、現用の「分詞構文」に相当する概念、訳語、その例文 (句) についての記述は一切、ない。

5.3-2 『英吉利文典字類』²⁵ (1866) 二頁

篇中所用畧字

advised 規他動現 (ママ) 過 知ラセシ 処分 知ラセラレタル 自動 (不移行動詞)²⁶

本書は 5.3-1 『英吉利文典』の簡易辞書とされ、その例文より抽出した単語をアルファベッ

²²『英吉利文典(通称「木の葉文典」)』慶応元年(1865)(原題: *The Elementary Catechisms, English Grammar*; London, 1850) Q&A 形式による英文典であるが、各品詞についての簡略な解説に留まる。

²³これまで、本書の著者名について不明とされてきたが、石原千里氏により初めて確認された。

「*The Elementary Catechisms, English Grammar*; 1850—『伊吉利文典』、『英吉利文典』(木の葉文典)の原本」『英学史研究』(40) 日本英学史学会、2007。pp. 37-53 参照。

²⁴本書と同じく、当該期、我が国に持ち込まれた英文法書(原本)では表題のみ日本語で書かれ、全文が英語による覆刻版が多くみられた。後掲の『ピ子ヲ氏原板英文典』も、同様である。

²⁵足立梅景譯編『英吉利文典 字類』、伊月村舎、慶応2年(1866)。

井田氏(1970)は、これを「『和蘭文典字類』飯泉士讓選、安政3年(1856年)、山城屋作兵衛、東都書林の編集方式を英学に転用した注解辞書である」と指摘する。

²⁶他に、*acquired*「處分」得ラレタル、*added*「處分」附ケ加ヘラレタル等がみられる。(同、三頁)。

ト順に並べ、これに訳を加え、簡略な文法的付注 (parts of speech, inflectional form) をみる。この点で、まさに原本 (5.3-1) の parsing (梅景はこれを「部分(ケ)スルコト」と訳している) が配慮された画期的な辞書を呈しているといえよう。ただ、統語関係には触れていない²⁷。

5.4 『ピ子ヲ氏原板英文典』²⁸について

5.4-1 *The Primary Grammar* (原題) (1869:142-143)

What is the **participle**, or **participial mood** ? How are participles parsed ?

RULE XI – **Participles** are pased [sic] :

1. **As adjectives and verb** ; as, The ship, *entering* the rapids, was wrecked.
2. They may be parsed as noun and verbs ; as,
The ship, upon *entering* the rapids, sunk, or
Upon the ship's *entering* the rapids, it sunk,
3. They may be used as adjectives alone, when they are called **participial adjectives** ; as, The *rising and setting* sun.
4. They may be used as nouns alone, when the [sic] are called **participial nouns** ; as, The *rising and setting* of the sun.

本書では、participles は 4 種に分類される。単に adjectives and verb の性質を兼ねた participle の第一分類として、その例に The ship, *entering* the rapids, was wrecked. なる記述をみる。ここに、participial construction なる範疇、用語はない。しかし、まさしく、これは、現用の「分詞構文」の例としてみてとれる。

筆者が調査した限りであるが、当該期にあって、我が国へ持ち込まれた英文法書 (原書) の中で、現用の participial construction と解される例文が記述されたのが、この T. S. Pinneo による本書 *The Primary Grammar* であり、ならびに、後掲の G. P. Quackenbos による 5.5-1 *First Book in English Grammar* であろうと推定するものである²⁹。

5.4-2 慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』³⁰ (1870) 五十一～五十四頁

何デアルカ 分詞 又ハ 分詞法ハ ドノ様ニ サルハカ 分詞ハ 解剖
規則 第十一 分詞ハ サルハ 解剖 シテ 形容詞 而メ 動詞ト 譬ヘバ 船
ガ 進入リツ、 瀬ニ サレシ 破損 コハデハ エントリングハ 如ク 形容詞
ノ一致ス 與 シップ 従フテ ニ キソク 第七 而メ 如ク 動詞ノ 支配ス
賓格ヲ ラピツナル 従テニ 規則 第三ニ 彼等ハ 得ル サレ 解剖 シテ
實名詞 而メ 動詞ト 譬ヘバ 船ガ 於テ 進入ル7ニ 瀬ニ 沈ミシ 或ハ 於
テ船ノ 進入ル7ニ 瀬ニ 其ガ 沈ミシ コハデハ エントリングハ 成ル 實名
詞ト 従テ ニ 規則 第三 ニ 彼等ハ 得ルラレ 用ヒ シテ 形容詞ト 唯其
時ニハ 彼等ガ ラル、 名付ケ 分詞状形容詞 ト 譬ヘバ 昇ル處ノ 而メ
没スル處ノ 太陽 コハデハ ライジング 而メ セッチングハ アル 分詞状形容
詞デ 四 彼等ハ 得ル ラレ 用ヒ シテ 實名詞ト 唯 其時ニハ 彼等ガ
ラル、 名付ケ 分詞状名詞ノ 譬ヘバ 昇ル7 而メ 没スル7 ノ 太陽 コハデ
ハ ライジング 而メ セッチングハ アル 分詞状名詞デ

本書の第一の例文に、適切な和訳<船ガ 進入リツ、 瀬ニ サレシ 破損>が与えられていることから、現用の「分詞構文」につながる副詞句の働きについて、訳者、永嶋貞次郎がすでに、十分に把握していたと考えられる。ただ、その用法に「形容詞 而メ 動詞」とあり、そ

²⁷井田氏(1970)は、これを『和蘭文典字類』飯泉士讓選、安政3年(1856年)、山城屋作兵衛、東都書林の編集方式を英字に転用した注解辞書である」と指摘する。

²⁸慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典』尚古堂、明治2年(1869) p. 113。

²⁹G. P. Quackenbos, *First book in English grammar*, New York, 1875。

³⁰永嶋貞次郎譯慶応義塾読本『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』、尚古堂、明治3年(1870年) 解説ならびに、例文(句)とも片仮名交じりの和文だけで英文での記載はない。

こに、渋川が指摘したく添旁辞（筆者注：副詞）>なる付注は確認されない³¹。

5.5 『格賢勃斯英文典直譯』について

5.5-1 *First Book in English Grammar*³² (1875: 60)

What is a Participle ?

A Participle is a form of the verb that generally qualifies or limits the meaning of a substantive, by assuming some action or state in connection with it. Thus ;

— **Participles.** — an *amusing* story ; flowers *withered* by the heat.

Is a participle ever used without a substantive ?

Yes, and it is then said **to be used independently** ; as,

“ *Generally speaking*, murder will out.”

本書では、単純分詞としての定義が明記されており、その例に *amusing*、*withered* をみる
が、先述 (5.3-1) の imperfect or active participle、あるいは perfect or passive participle
なる文法用語の記述はない。

しかし、この形容詞的機能のほかに、動詞と接続詞の機能を兼ねた例文 (*Generally speaking*,
...) に大いに注視したい。ここでは、現用の participial construction なる語こそ与えられては
いないが、文法的付注 (to be used independently) がある。その意味するところは、元来、
分詞が持つ形容詞としての役割ではなく、主節から離れ、副詞句の働きを有する「独立分詞構
文」を指すものと解されるであろう。

5.5-2 『格賢勃斯英文典直譯』³³ (1870) 六十四頁

分詞ハ 何デアルカ

分詞ハ 働詞ノヲ 造リ其レハ 一般ニ其レト結ビ附キニ於テ アル働き或ハ 有
様ヲ 取ルヲニ因テ 實名詞ノ意味ヲ極メ 即チ 極メル處ノ {働詞ノ形造リ} デ
アル 分詞 --- an *amusing* story flowers *withered* by the heat.

Generally speaking, murder will out.

一般ニ 話スヲデ 人殺シガ 發覺スルデ アロウ

本書でも、participle に纏わる概念、定義、またその例文 (句) について、上掲の 5.5-1 *First Book in English Grammar* のそれとすべて一致する。ただ、底本の 5.5-1 に、現用の participial construction なる用語が明記されておらず、当然、ここでも、現用の「独立分詞構文」なる訳語はない。

Generally speaking,...について、底本に倣い、例文は同じく確認でき、その和訳も<一般ニ話スヲデ>となっている。底本 (5.5-1) にみる解説部分 (to be used independently) については、和訳がなされていないのはなぜか。

推測の域を出ないが、訳を担った南校助教により、~ing にあたる訳として<話スヲ (筆者注：こと)> が与えられていることから、訳述者が単に、現用の「動名詞」と解した可能性も否めないが、他方、<話スヲデ>にみるように、助詞<デ>を補うことで、単純分詞ではなく、何らかの独立した句 (それが副詞句との十分な理解とは言えないまでも) が存在するであろうことを認識している可能性も否定できないように思う。となれば、その認識は十分にありながらも、解説部分 (to be used independently) が意味するところを把握するには、いささか無理があり、単に、これを訳述しなかったのであろうか。

5.6 『ブラウン氏英文典直譯』について

³¹ 『ピゾヲ氏原板英文典直譯』における特記すべき事項については、拙稿 (「幕末から明治初期の英文典にみる「動詞の変遷に纏わる一考察」(『言語文化の比較と交流』言語文化共同研究プロジェクト 2013、大阪大学大学院言語文化研究科) p. 29 を参照されたい。

³² G. P. Quackenbos, *First book in English grammar*, New York, 1875.

³³ 大学南校助教譯『格賢勃斯英文典直譯』明治3年(1870)十七頁。

5. 6-1 *The Grammar of English Grammars* ³⁴(1877:149)

Participles may be separated into two other classes : those which participate the properties of a verb and an adjective, and those which participate the properties of a verb and a noun. The latter are sometimes called gerundives. The following are examples of each :

First Class.—**Verb and Adjective.**

He came *running* very swiftly.

She, *dying*, gave it me. [sic] The enemy, *having been defeated*, fled.

Second Class.—**Verb and Noun**

After having paid the money he retired. Before *leaving* the city he paid his debts.

5. 6-2 『ブラウン氏英文典直譯』³⁵ (1884) 百八十～百八十一頁

分詞ガ、更ニ、ニツノ階級ニ マデテ 分タレ得ル、其レ等ソレハ 動詞而シテ形容詞 ノ 性質ヲ分ケ取リスル {所ノ} 其レ等、而シテ 其レ等ソレハ 動詞而シテ名詞 ノ 性質ヲ分ケ取リスル {所ノ} 其レ等、第二ノ階級ノ其レ等ガ時トシテハ 動詞上名詞ト 名ケラル、(ママ)、次ノモノガ 各ノ例 デアル、

第一階級、— 動詞而シテ形容詞、

He came *running* very swiftly. 彼ハ 来リシ 走リツ、 甚ダ 速ニ

She, *dying*, gave it me. 彼ノ女カ 死スル所デ 與ヘシ 其レヲ 迄デ 余ニ

The enemy *having been defeated* fled. 敵カ タ所デ レ 破ラ 逃レシ

第二階級、— 動詞而シテ名詞、(動詞上名詞)

After having paid the money he retired. 彼ハ タノ 拂ウ金銭ヲ 彼レガ 退キシ

Before leaving the city he paid his debts.

前 退クノ 市街ヲ 彼レハ 拂ヒシ 彼レノ 負債ヲ

6. Participial Construction に纏わる訳語類型の分析結果

本稿では、おもに、幕末から明治初期までの訳述英文法書とその底本、あるいは、翻訳の際、依拠したであろう原書とを照合することで、両者にみる異同に注視し、比較、調査を行った。その類型分析結果から、まず、**participial construction** といった範疇そのものが、英学黎明期、我が国に輸入、翻刻された英文法書(原書)において、扱われておらず、それに相当する文法用語も記載されていないことが判明した。したがって、その訳述英文法書においても、その概念、定義について触れたものはほとんど皆無であった。

しかし、先述した Quackenbos (1875) において、唯一、**participle** 「単純分詞」の用法とは明らかに区別された、別の機能を持つ-ing 形の存在が認識されている。そこでは、的確な文法用語ではないものの、用語らしき記述がみられた。当該箇所を以下、確認する：

Yes, and it is then said **to be used independently** ; as,
“*Generally speaking*, murder will out.”

ここでは、分詞が元来もつ名詞に係る形容詞的機能ではなく、意味機能の観点から、動詞と接続詞の機能を兼ねた、副詞句として独立した働きがあることを明示している。例文 (“*Generally speaking*, ...”) では、今日いうところの「独立分詞構文」に相当する例が Quackenbos (1875) の本書において、確認できるのである。

一方、その訳述書 5.5.2 『格賢勃斯英文典直譯』において、上で触れた **to be used independently** のくだりについて、訳述者である南校の助教による訳出はみられず、当然、「分詞構文」なる訳語もない。しかし、先述の通り、その例文 *Generally speaking*... では、**助詞 <デ>** を添え、これを副詞句と解した和訳 <一般ニ話スヲデ> 人殺シガ 発覚スルデアロウ (筆者注：人

³⁴Goold Brown, *The Grammar of English Grammars*, New York, 1877.

³⁵中西範譯『ブラウン氏英文典直譯』二書房、明治17年(1884)。

殺シハバレルモノダ) > が確認された。

したがって、当該期にあって、我が国に持ち込まれた英文法書（原書）の中で、**participial construction** なる文法用語ではないが、**to be used independently** との文法上の付注に加え、はじめて、その例文が明示された原書が *Quackenbos, First Book in English Grammar* であろうとの分析結果を得た。また、訳述書のひとつとして、「分詞構文」なる現用の訳語こそ確認できないものの、「単純分詞」以外の分詞（副詞句をなす分詞）として認識され、助詞「デ」を添えることで、副詞句を反映した和訳が初めてみられたのが、その訳述書『格賢勃斯英文典直譯』であろうとの結果も得られた。

ただ、ここでは、上掲書『格賢勃斯英文典直譯』が、副詞句をなす分詞用法が認識された訳述書のひとつであろうと推定するに留めたい。同書（『格賢勃斯英文典直譯』）が訳述される三十数年前、先述の『英文鑑』においても、「分詞構文」に当たる訳語は見受けられないものの、「分詞」の項で挙げられた例文の中で、『格賢勃斯英文典直譯』と同じく、副詞句と解した和訳が与えられていることを、筆者は高く評価したいと思うからである。

“*Admired and applauded, he became vain.*” について、訳者、渋川は、助詞 <テ> を添え、< 驚嘆サレ 且 コエヲ揚ゲ称赞セラレテ 彼レハ ナリシ 傲慢ニ > の和訳を付している点で、これを副詞句と解していることが明白であろうと考える。

くわえて、「分領辞」なる訳語に加え、按文として「添名辞及ヒ添旁辞（筆者注：現用語「副詞」）ノ義ヲ兼領スルカ故ニ」と明記している点に注視したい。

“*Admired and applauded, he became vain.*” では、主節の前 *applauded* で、コンマが付されていることから、渋川は訳文に助詞 <テ> を添え、副詞的な意をもって、これを次の主節にかけた訳を添えている点である。

当該期、分詞が共有する特質は、通常、名詞に係る「形容詞的機能」と捉えていたであろうことは、先の検討結果からも明らかとなったが、その中において、上の例にみる過去分詞 (*Admired and applauded*) には、他の意味機能をも有する働き（今日の「副詞的機能」にあたる）があることを、渋川がすでに把握していたのではないか。くわえて、その例文の和訳から、同義の副詞節による書き換えが可能であることも、渋川にいささかの認識があったとなれば、その洞察力は高く評価されるのではと考える。

さらに、明治期に入り、『格賢勃斯英文典直譯』の刊行とほぼ時を同じくした『ピ子ヲ氏原板英文典直譯』で検討した例文の和訳 <船ガ 進入グツ、瀬ニ サレシ 破損> ならびに、『ブラウン氏英文典直譯』にみる例文 (*She, dying, gave it me. [sic]*) の和訳 (<彼ノ女カ 死スル所デ 與ヘシ 其レヲ 迄デ 余ニ>) においても、同じく、現用の訳語「分詞構文」は創出されていないものの、いずれの訳述書においても「副詞句をなす分詞」（「分詞構文」に相当する）に纏わる概念をすでに把握していたことを反映した訳といえるのではないかと考え、これを以て、本節、類型の分析結果としたい。

7. おわりに

本稿の意図するところは2つのテーマであった。まず、調査対象とした英学黎明期において、現用の文法用語 **participial construction**、ならびに、「分詞構文」に相当する概念、訳語の推移について、原書とその訳述書とを照合の上、その異同に注視し、調査、検討することであり、つぎに、定訳となった「分詞構文」なる用語が齋藤秀三郎により創出されるに至るまでの訳述起源についても明らかにすべく、探究しようとするものであった。

前者については、その分析結果が得られたのではないかと思う。しかし、後者である齋藤（1898-99）で初めて用いられた **participial construction** なる用語、さらに、同じく齋藤（1949）で宛がわれ、定訳となった「分詞構文」なる訳語の創出起源については、本稿の中で明らかにすることはできない結果となった。

今日の **participial construction** 「分詞構文」に相当する例文が確認されながらも、分詞の副詞的用法として区別されることなく、一連の形容詞的用法として、扱われていたと考えられる。したがって、本稿第4節で検討したスウィート（1891）の見解によれば、当該期の原書において **construction** としての十分な組織化がなされていなかったことが考えらる。

筆者が行った本検討結果からも、同じ結果が得られたように思う。調査対象とした限りであるが、当該期、我が国に持ち込まれ、翻刻された英文法書（原書）における、すべての~ing

形は、動詞と形容詞を兼ねたもので形容詞的機能をもつ分詞、すなわち、単に現在分詞、過去分詞と解されていたこと。したがって、当該期において、**participial construction** にあたる文法範疇は、こうした **participle** 「単純分詞」の用法と区別されることなく扱われ、他の機能を持つ～ing 形（副詞句）の認識が十分になされていなかったことが明らかとなった³⁶当然、その訳述書に、斎藤による定訳「分詞構文」なる用語も確認できないことになる。

しかるに、なぜ、斎藤は如何なる原書に依拠した上で、先述の *PRACTICAL ENGLISH GRAMMAR* (1898-99) において、**participial construction** なる範疇、用語を採り上げ、これに解説を加え、さらに、『新標準英文典（下）』（1949）の中で、定訳となった「分詞構文」なる訳語を案出したのであろうか。

この疑問を明らかにするには、本稿の調査対象とした明治初期までに限らず、明治中期以降に輸入、翻刻され、我が国の英学に大いに影響を及ぼしたであろう、スウィントン (W. Swinton)、メイソン (C.P. Mason)、ベイン (A. Bain)、ネスフィールド (J.C. Nesfield) さらに、ブリנקリ (F. Brinkley)、チェインバレン (B.H. Chamberlain) 等による英文法書（原書）ならびに、それらの訳述英文法書についても、さらなる調査対象に組み入れる必要があるであろうことを付記して、本稿の結びとしたい。

【参考文献】

Bruce Mitchell and Fred C. Robinson,

A Guide to Old English Seventh Edition, Blackwell Publishing, Oxford, 1964

J. A. Burrow and Thorlac Turville-Petre,

A Book of Middle English, Third Edition, Blackwell Publishing, Oxford, 1992

井田好治 「明治における英文法範疇・訳語の変遷」(『言語科学』第4号、九州大学言語会、1968)

「薩摩の英学(3) 一足立梅景編述『英吉利文典字類』考」(『英語英文学論叢』第20集、九州大学英語英文学研究会、1970)

「『諳厄利亜語林大成』の英文法論について—本文校訂と英文法史的再考察」(日本英学史学会編『英学史研究』第8号、1975)

「日本の初期英語辞典—英語の辞書<特集>-理論と実際—」(『英語青年』127号、研究社出版、1981)

「長崎原本『諳厄利亜興学小筈』『諳厄利亜語林大成』の研究」(『長崎原本『諳厄利亜興学小筈』『諳厄利亜語林大成』研究と解説』日本英学史料刊行会編、大修館書店、1982)

伊藤裕道 「現在分詞と動名詞(—ing form) 文法事項の指摘検討(4)」(『日本英語教育史研究』第14号、日本英語教育史学会、1999)

岡田和子 「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷(7) 現代文法から見た誤解」(『外国語教育論集』26、筑波大学外国語センター、2004)

「『和蘭語法解(オランダごほうげ)』の原典は Peyton の英文法書か」(『外国語教育論集』第28号、筑波大学外国語センター、2006)

勝俣詮吉郎 『日本英學小史』研究社、1936

重久篤太郎 『江戸英学史の片影』同志社高等商業学校商業研究会、1932

朱鳳 「馬禮遜的漢訳西書封日本の影響—以『英國文語凡例傳』為例」(『アジア文化交流研究』第3号、関西大学アジア文化交流センター、2008)

³⁶当該期の英文法書（原書）における **Participial Construction** なる用語について、同じく伊藤裕道（1999）による以下の指摘をみる。p. 70。

「第3例（筆者により例を省略）は分詞構文であるが、特別の名称を与えず、**participle** の例文としていただけである。後に触れるように、分詞構文と他の分詞の用法を分けることは当時の英米の文法書には、ほとんどないと言ってよい」。

- 杉本つとむ『日本英語文化史の研究』八坂書房、1985
- 高梨健吉『日本の英語教育史』大修館書店、1975
- 竹村覺『日本英學発達史』研究社、1933
- 豊田實『日本英学史の研究』岩波書店、1939
- 飛田良文「英文典直訳と欧文直訳体」(『日本語の研究<特集>資料研究の現在』第4巻1号、国際基督教大学アジア文化研究所、2008)
- 水野修身「幕末・明治期の英文法における‘Gerund’の概念について」(『埼玉学園大学紀要. 経営学部篇創刊号』埼玉学園大学、2001)
- 「明治期における‘Voice’をめぐる訳語に関する考察」(『防衛大学校紀要 91 輯人文科学分冊』2005)